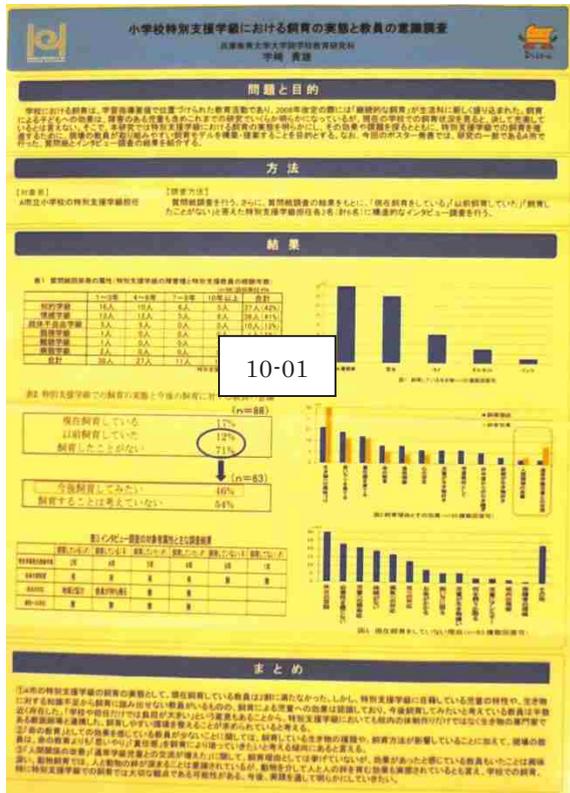


パネル発表「小学校特別支援学級における飼育の実態と教員の意識調査」

宇崎 貴雄



1 はじめに

飼育は学習指導要領で位置づけられた教育活動である。現行の小学校学習指導要領では理科、生活科などにおいてその記述があり、2008年改定の際には「継続的な飼育」が生活科に新しく盛り込まれた。また、文部科学省は2003年作成の「学校における望ましい動物飼育のあり方」に適切な飼育によって培われる力を明記し、全国の国公私立の全幼稚園、小学校、盲・聾・養護学校に対して配布している。

飼育による子どもへの効果は、これまでの研究でいくらか明らかになっている。中島ら(2011)は、適切に飼育することで、子どもたちの「動物への共感性」「学校適応」「他者への温かさ」「向社会的態度」が高い値を示すという研究結果を報告している。また、特別支援教育の視点では、動物に対する乱暴な行動が見られた高機能自閉症児に対するネコを介したプログラムにより、

その行動が完全に生起しなくなった事例(奥田ら, 2009)や、教室にイヌがいることで、ADHD児の集中力向上や授業参加に大きくつながった事例(的場, 2013)が見られた。生き物と触れ合うことが障害のある児童にとっても効果をもたらすとと言える。

しかし、現在の学校での飼育状況を見ると、決して充実しているとは言えない。朝日新聞に掲載されている大阪府教育委員会の調査(2013)によると、小学校での飼育率は42.9%で半数を下回っており、「休日の世話をしない」と答えた学校が34.6%に上ると報告している。また、学校飼育動物に関する研究はあるものの、特別支援教育の現場に限定すると、飼育の実態や、効果、課題については、事例も少なく明らかになっていない。

そこで、本研究では特別支援学級における飼育の実態を明らかにし、その効果や課題を探るとともに、特別支援学級での飼育を推進するために、現場の教員が取り組みやすい飼育モデルを構築・提案することを目的とする。

2 研究方法

A市立小学校特別支援学級における学級飼育の実態について、質問紙調査およびインタビュー調査を行う。質問紙の内容はA市教育委員会指導主事2名と、福井県獣医師会へのインタビュー調査等をふまえて作成する。A市の特別支援学級担任者会にて、質問紙を配布し、依頼文と口頭にて研究の趣旨説明と依頼を行う。さらに、質問紙調査の結果をもとに、「現在飼育をしている」「以前飼育していた」「飼育したことがない」と答えた特別支援学級担任各2名(計6名)に構造的なインタビュー調査を行う。

3 調査内容

質問紙調査では、①特別支援学級担任としての経験年数や現在担任している障害種、②現在または以前の学級飼育実践の有無、③飼育実践のある生き物の種類とその飼育のねらいや教師の感じる児童への効果、④現在、飼育を行っていない場合の理由などを質問する。

構造的なインタビューでは、①教師自身の飼育暦や学級飼育をはじめのきっかけ、②校内・保護者との連携や休日の世話、③飼育費用・時間的負担・病気への対応などを質問する。

4 結果

質問紙調査の結果、飼育の実態として、「現在飼育している」学級の割合は17%であった。（表1）

実際に飼育している生き物としては、「魚類（金魚、メダカ等）」（64%）、「昆虫（青虫、カブトムシ等）」（56%）が多く、小動物では、モルモット（7%）、インコ（3%）であった。（図1）

飼育の目的としては、「生き物への興味づけ」が最も多かった（64%）。また、「学習教材として」飼育をしていたのは、「以前飼育していた」と回答のあったグループのみであった。飼育の効果としては、「生き物への興味が高まった」（100%）が最も高く、次いで「思いやりが育った」（44%）、「責任感が育った」（44%）という結果となった。また、飼育理由より効果の方が高い値を示したものとして、「生き物への興味づけ」「人間関係が改善した」「通常学級児童との交流が増えた」が挙げられた。（図2）

現在飼育を行っていない理由としては、「休日の世話が大変」（48%）が最も多く、次いで「必要性を感じない」（37%）「児童への感染症が心配」（33%）「時間がない」（30%）「病気への対応」（27%）となった。（図3）これらの理由は、障害種、特別支援学級担任の経験年数との間に関連性がみ

表1. A市特別支援学級での飼育の実態 (n=88) 回収率62.4%

現在飼育している	17%
以前飼育していた	12%
飼育したことがない	71%

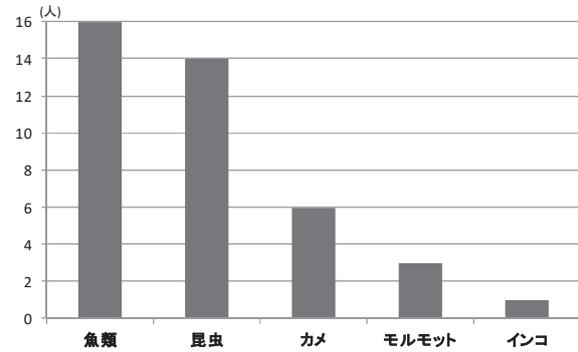


図1. 飼育している生き物 (n=25, 複数回答可)

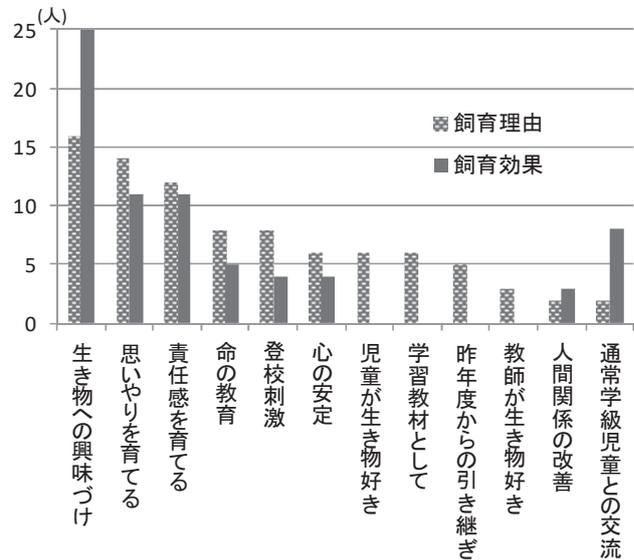


図2. 飼育理由とその効果 (n=25, 複数回答可)

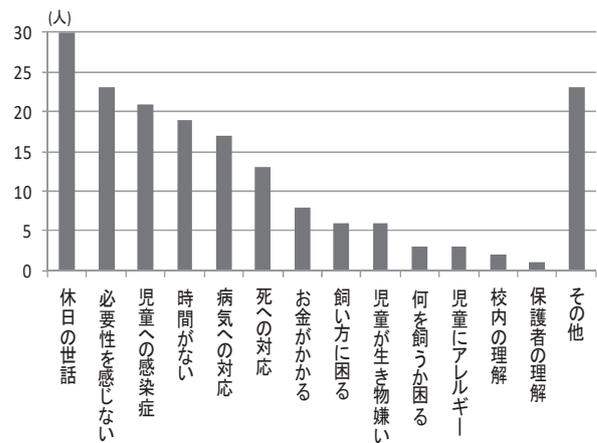


図3. 現在飼育をしていない理由 (n=63, 複数回答可)

られなかった。しかし、飼育をしていない理由の「飼育の必要性を感じない」という項目に関しては、学校飼育がある学校と学

校飼育が無い学校とで有意な差があり (P=0.0147), 学校飼育がある学校の教員の方が, 特別支援学級での飼育の必要性を感じていないことが明らかになった。

表1で「以前飼育していた」「飼育したことがない」と回答した教員のうち, 今後「飼育してみたい」と考えている教員の割合は46%であった。(表2)

表2で「飼育してみたい」と回答した教員のうち, 今後飼育してみたい生き物の種類は, 「魚類(金魚, メダカ, 熱帯魚, ナマズ)」(55%)が最も多く, 「小動物(ハムスター, モルモット, ウサギ)」の割合は, 22%であった。(図4)

表2. 今後の飼育に関する教員の意識 (n=63)

飼育してみたい	46%
飼育することは考えていない	54%

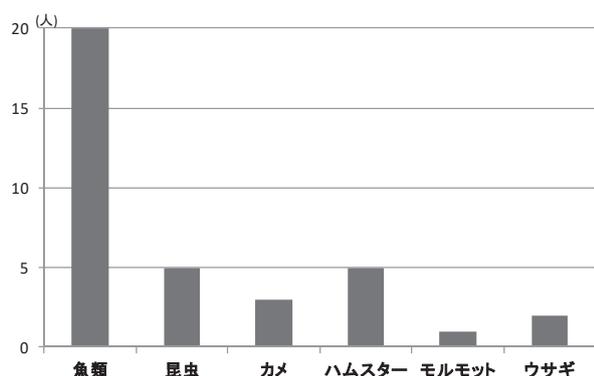


図4. 今後飼育してみたい生き物 (n=28, 複数回答可)

質問紙調査の自由記述の結果, 教員は生き物を飼育することでの効果を認識しているが, 病気や死への対応, 感染症などを考えると「学校や担任だけでは負担が大きい」という意見が複数あった。また, 特別支援学級の児童の特性として「突発的な行動がある」「自分のことが自分でできにくい」といった理由から特別支援学級での飼育は難しいという意見があった。

インタビュー調査の結果, 実際に飼育に取り組んだ経験のある教員は全員, 自身が幼いころ生き物を積極的に世話した経験が

あった。また, 時間的な負担に関しては, 世話を教育活動の中に位置付けることで, 負担を感じることなく実践していた。休日の世話については, 「教師が持ち帰る」「校舎外に置くことで, 地域の協力を得る」という工夫があった。しかし, 生き物が病気になった時は, 何の対応もしていないことが明らかとなった。

5 考察

A市の特別支援学級の飼育の実態として, 現在飼育している教員は2割に満たなかった。しかし, 特別支援学級に在籍している児童の特性や, 生き物に対する知識不足から飼育に踏み出せない教員がいるものの, 飼育による児童への効果は認識しており, 今後飼育してみたいと考えている教員は半数近く存在した。「学校や担任だけでは負担が大きい」という意見もあることから, 特別支援学級においても校内の体制作りだけではなく生き物の専門家である獣医師等と連携した, 飼育しやすい環境を整えることが求められていると考える。

「命の教育」としての効果を感じている教員が少ないことに関しては, 飼育している生き物の種類や, 飼育方法が影響していることに加えて, 現場の教員は, 命の教育よりも「思いやり」「責任感」を飼育により培っていきたいと考える傾向にあると言える。

また, 「人間関係の改善」「通常学級児童との交流が増えた」に関して, 飼育理由としては挙げていないが, 効果があったと感じている教員もいたことは興味深い。動物飼育では, 人と動物の絆が深まることは意識されているが, 動物を介して人と人の絆を育む効果も実感されているとも言え, 学校での飼育, 特に特別支援学級での飼育では大切な観点である可能性がある。

さらに, 実際に飼育されている生き物や今後飼育してみたい生き物として「魚類」が高い割合を占めている。小動物のように

触れて体温を感じられる生き物ではないが、全員が子どもへの効果を実感されていた。現在、獣医師等と連携した小動物の飼育については研究が進められているが、魚類についても教育的な観点から研究していく必要があると考える。

参考・引用文献

文部科学省 (2006). 学校における動物飼育について.

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/06121213.htm

中島由佳・中川美穂子・無藤隆 (2009) 学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響. 日本獣医師学会誌.

64 : 227-233.

的場美芳子 (2013) 学校現場における動物介在療法を考える. 日本教育心理学会総会発表論文集. 55 : S90.

奥田健次・小口詔子 (2009) 動物に対する乱暴がみられた高機能自閉症児への指導. 日本行動分析学会発表論文集. 27 : 85.

『朝日新聞(大阪市)』2014年4月13日「ウサギ, 正しく飼って」.

河村美登里・坂田佳英・湯藤恵悟・山下和子・菊池和子・土井章三 (2013) 学校等における動物飼育の現状と課題. 広島県獣医師学会誌. 28 : 103-108.

(兵庫教育大学大学院)